

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年七月
かげろう 風舎 春香 珪子 音思 静香 京子	ことは	るみ子		ことは 隆夫 粉雪 月を	鶴城	美佐枝				朝香	きいち	光雲2 正信 のぞみ 清吉 チアキ	修		
綿あめに児の顔かくれ祭笛 夏祭りにお子さんかお孫さんと出かけた時の、ほのぼのとした景が見える。温かく好まします。素直な、愛らしげな幼子が綿飴を食べているところ。温か目によります。たまたま、中七が惜しいと感じ、普通選にしました。綿あめが大好きという可愛さが伝わって来る。祭笛の幹旋が秀逸。子供のお顔、祭りの賑わいが伝わる。顔より大きな綿あめの裏の笑顔が見える。笛の音による視覚から聴覚への拡がり。句の中にハレの空を生まみ出している。どうか迷子になりませぬように。	噴水の前の約束ハイヒール 物語のはじまりですね。	公園のラジオ体操半夏生 夏のラジオ体操私も参加しています。季語が良い。	夏河原白一色になりけり	雲灼ける今日も平たく生きており 「平たく」の措辞が、いいですね。「平たく生きる」同感です。何事もなく生きていくことを平たくと。いいですね。諦念でもなく達観でもないでしょう。自然体でしょうか。	風死すや祈りの花の花鉢 墓参の景である。お供えの花を丁度良い長さに揃えている花鉢。油照りと蟬しぐれをも感じさせる。	ただ暑し三日三晩の窯守り 窯焚きの大変さ、限界状態の焼物の世界。	走り根の絡むなぞへや夏深し	炎昼の耳たわませる戦闘機	北の金南越前夏休み	庭熟れのブルーベリーや朝の幸 庭で採れたブルーベリーを朝食で楽しむ、幸いそのものですね。	酒を注ぐ切子硝子に夏が来る 江戸切子のグラスに冷えた日本酒、夏はこれに限る。	月下美人開き一夜の媚びを売る 媚びを売る女王花に無常観すら感じる。月下美人は、夏の夜四時間位咲いて萎んでしまう。それを「一夜の媚」と表現した所が秀逸。下五の表現在印象的であり、季語を引き立てている。一夜の媚びを売る、感覚に恐れいりました。	死者生者渡る海坂虹の橋 虹の橋を海坂に見立て虹の向こうに神の国を想像した発想がユニークである。	乱打ちの猛き少年晩夏光	
後記朝香	本橋稀香	反町 修	奥山粉雪	霜里	檜鼻ことは	池田珪子	吉沢美佐枝	ほのる	網野月を	秋谷風舎	古賀由美子	俳爺	木村隆夫	荒 一葉	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
			俊晴	文孝 允舎 風京子	ことは 正信 音思 翔太		由美子 稀香 曆文 のぞみ 美佐枝 静香 芳春 マスミ 珪子 ほのる 鶴城 チアキ	六弦	光雲2 清吉 朝香	由美子 粉雪		光雲2 修舎 風喜夫 喜夫 きいち かげろう	俳爺 俊晴	由美子 清吉
色褪せた手紙開くやソーダ水	熱々の茶を啜りてや夏の朝	裾濡らす家庭菜園夏の朝	川幅をはみ出してをり夏の川	立葵祖母の教への矜持かな	泥鱈鍋江戸が息づく小料理屋	雷雨来てラッシュ時のごと出入口	笹舟の船頭となり糸とんぼ	夏柳瓜実顔に泣き黒子	手捻りの備前の壺に緋のダリア	夕虹を父とながむるベンチかな	喜雨しきり貸農園の満たさるる	瞬きも惜しむ逢瀬や蛍の夜	ソーダ水打ち明け話嘘ばかり	ねじ花や刻む螺旋の設計図
立野音思	寒立馬	染谷正信	石関六弦	青木鶴城	井口俊晴	かげろう	後藤允孝	保坂翔太	丸山マスミ	木村るみ子	森美枝子	新曆文	望月のぞみ	光雲2

ねじ花に螺旋形の設計図を見る発想が秘密っぽくで楽しい。中七、下五の表現が巧みであり、季語の特徴を見事に言い表している。

三段切れの様相ではあるが、リズムで軽妙な詠み方を戴いた。酷い話ですね。ソーダ水の泡の数ほど嘘だったらたまりません。

七夕の夜のワンシーンを取り取つたい句です。蛍の飛び交う夜の瞬きさえ惜しむ逢瀬はロマンチックである。螢の景ではあるが、若い頃の逢い引きを、喜びを思い出して詠んだのだろう。「瞬きも惜しむ逢瀬」表

現が秀逸である。青春時代に戻りたいほどのトキメキを感じました。瞬きを惜しむ逢瀬とは？不倫の匂い。事情を想像させる一瞬の切り取り方に好感

メルヘン。いろいろな父子像を想像します。少し年老いたお父様との一幕ですか？絵のようです。

中七と下五の緋のダリアが句を引き締めていいですね。季語の持つ華やかさと、壺の対比が優れている。上五、中七の渋さに下五の緋色がよく映えている。

和風な感じが良い。誰の顔でしょうか？

のどかかわい景色です。メルヘンの世界感。糸とんぼの船頭に共感しました。笹舟なればこそ。笹舟も糸トンボも儂げで、涼味のある句です。糸とんぼと一緒にこの船に乗って見たい。絶え間なく飛び回る糸とんぼ、笹の葉に止まった瞬間を捉え船頭となぞらえた発想の良さ。トンボが偶然、舳先に泊まった、自然現象なのに、微笑ましい。笹舟と糸とんぼの取り合わせが良い。糸とんぼは小さくて可憐。笹舟に一休みしている景を船頭と捉えたところ良い。絵本の一ページが浮かんだ。糸とんぼが笹舟の船頭となつていて、視点が良いです。

お江戸の泥鱈鍋、わくわくしますね。場所は辰巳芸者を産んだ深川あたりか。女将は「浜木綿子」似か？江戸を懐かしむ良い句だと思いましたが。老舗の小料理屋で泥鱈鍋をつつきながら冷たいビールを飲む姿が目

凛とした祖母の教え。立ち振る舞いを教えていたこととありがたいことです。上五の季語が良いですね。季語から、背筋が伸びた大和撫子のような祖母の姿が連想されると共に、きりりと筋の通った骨太の教え、心構えが伝わってくる。構成、調べ、表現とも秀逸である。立葵の姿と祖母の生き方が重なる。

集中豪雨のためでしょうか。歳時記を超えた気象です。

川幅をはみ出してをり夏の川

裾濡らす家庭菜園夏の朝

熱々の茶を啜りてや夏の朝

色褪せた手紙開くやソーダ水

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年七月
美佐枝 るみ子		粉雪 正信	静香 道を	寒立馬	修		寒立馬				俳爺 晴春 俊香	マスミ	チアキ 月を	稀香	
夫婦とは同志で仇夏椿 色々なスタイルの夫婦、同志で仇というかライバルなのでは？素敵な関係ですね、季語はもつといいものがあるかも。夫婦とは…そうかもしれ ませんね。	渾身の素振り百回汗しとど	九割は見てくれですか牛蛙 一割で九割をカバーすることができたら素晴らしい！牛蛙は肉の旨さ決 まる。男も外見でなく心で決まりますと作者の弁。	綿津見に浸す北斗の杓涼し 景が大きく、涼しさも強。素晴らしい。俳味有る綺麗な句ですね。	炎昼や時代遅れの商店街 世の移り変わり、ここは故郷か。季語が効いている。	遠雷や息潜めたるサスペンス 遠雷とサスペンスの取合せが見事で聴覚と視覚を刺激する。	リモートワークの余暇を楽しむ夏の山	残されて足掻く蜥蜴の尾の無念 無念さが自分と重なる。しばし過去と対話。	緑蔭や門に納まる朱のお宮	玄関の百合の香重く雨来る	巴里祭や愛の賛歌を今日も聴く	理科室の骸骨動く夜の秋 科室の骸骨という囁目が効いている。季語は熱帯夜がいいかも。夜更け の理科室の怪奇現象。本当にあつたらタイヘン。怪異もちよつと涼しい ほうが元気なんでしょうか？	山鉾の注連縄切の稚児の舞 3年ぶりに実施された祇園祭。見どころの一つに山鉾巡行がある。先頭 は生稚児さんをいただく長刀鉾。稚児さんが注連縄を切つて巡行が始ま る。都人でなくても待たれる祭。タイムリーで良い。	体重計土用鰻も載っかって ユーモアたっぷりで愉しい！姿が浮かんできます。滑稽句でもあります が、結構深刻な事態でしょうか。	幾星霜涸れぬ一滴夏の山 夏山に湧き続ける清水。何千年も続く水の摂理を讃えて美しい。	渋谷きいち
網野月を	俳爺	荒 一葉	木村隆夫	古賀由美子	持永喜夫	宮崎チアキ	岡田芳春	野田静香	山中いちい	小林京子	日高道を	村杉清吉	石田春香		

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年七月
隆夫 きいち		六弦 春香	美枝子 月を	ほのる			翔太	芳春 珪子 朝香			道を	一葉 允喜 夫子		稀香	
群青の山を崩せり土用波 土用波を旨くとらえています。大波を群青の山と表現したところが素晴らしい。	花菖蒲風はしる沼彩りて	老犬と片蔭分けてバス通り	二の腕の藪蚊を叩く新聞紙 無駄な言葉がなく、ストレートに仲の良さが伝わりました。旧道の狭い道幅の景が浮かび、日本各地の風物詩かとも思った。	サヨナラの白球伸びる雲の峰 季語が白球をさらに高くしている。	魂の化身雨夜の蛍かな	夏暁や日の出を拝む富士山頂	ソーダ水打明け話かき混ぜる 打明け話にどう答えていいのか思案顔が見えるようです。	箸取りで一息間のある暑さかな ほんの一瞬の動作に「暑さ」を捉えていてお見事です。「間」と暑さの関係が妙。夏の暑さで食欲も失せる様子が中七でよく表現されている。	摘むほどにブルーベリーや爪を染む	甚平や轆轤の音に託す夢	虹立つや生徒二人の分教場 生徒二人に素晴らしい未来があるように。	大の字に寝息健やか鼻の汗 平穩な暮らしの夏点描、「鼻の汗」への焦点の絞りが成功。確かにお子さんが鼻の頭に汗をかいている光景をよく見かけます。微笑ましいですね。健やかな孫の寝息が聞こえてくるようです。大の字と鼻の汗の取り合わせが良い。	池めぐす子亀の手足せはしなく	雲の峰高層ビルを押さへつけ 高層ビル（人間の技術）を遙かに凌ぐ自然の力を表現している。	
森美枝子	木村るみ子	望月のぞみ	新 曆文	後記朝香	光雲2	反町 修	本橋稀香	霜里	奥山粉雪	池田珪子	檜鼻ことは	ほのる	吉沢美佐枝	秋谷風舎	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年七月
るみ子		文 俳 翁 い ち い 鶴 城 音 思 の ぞ み 翔 太	寒立馬	芳春 六弦 道を	喜夫			一葉	かげろう 美枝子			一葉	隆夫		
合歡の花雨音を聴く日曜日 <small>合歡の花には雨が似合いますよね。</small>	子は忙に一人登山も慣れにけり	短冊に書けぬ願いや星祭 <small>「軽き音」が束の間の涼しさを伝えてくれます。夏らしさが視覚、聴覚、嗅覚に伝わりました。「軽き音」が程よいと思います。</small>	あめんぼの足滑らかに飛びにけり <small>いころ飽きなくみずすましを眺めた。17音にその不思議さがあった。</small>	真夏日やコーラの栓の軽き音 <small>「軽き音」が束の間の涼しさを伝えてくれます。夏らしさが視覚、聴覚、嗅覚に伝わりました。「軽き音」が程よいと思います。</small>	許すまじ暴挙七月の一票 <small>民主国家に1票。</small>	豆腐屋の喇叭で町は夏の朝	梅雨明けや沸き立つ雲が空の主	やじ馬の岡目八目油照 <small>下町の夏の風物詩、景が目に浮かぶ。</small>	なき顔で返しに来る子金魚釣 <small>「飼えない」と叱られた子の無念さが浮かぶ。意気揚々と持ち帰ったのに。</small>	渾身の毛針で勝負岩魚釣	麦飯と献立にあるサラメシ屋	万の歩を集め肅肅蟻の列 <small>ひたむきに生きる蟻の姿のいじらしさ、怠けてはおれない。</small>	禰宜の杳肅肅くぐる大茅の輪 <small>昨今の「茅の輪」俳句で一番良いです。</small>	一山の後背となる虹立ちぬ	
山中いちい	小林京子	石田春香	村杉清吉	立野音思	渋谷きいち	染谷正信	寒立馬	青木鶴城	石関六弦	かげろう	井口俊晴	後藤允孝	丸山マスミ	保坂翔太	

										80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年五月
											ほのる		マスミ 美枝子		
										下校後を田に急ぎし日半夏生	亡き父へ汽笛膨らむ夏の霧	出さぬ文嗟ふて破る五月闇	暴れ龍連れて梅雨雲戻り来る <small>この頃天候はおかしくて優しく優しくない。梅雨明け宣言があつたあとで、局地的に暴れ龍のごとき大雨がふつた。溜息が聞こえるようだ。梅雨末期の様子が良く現れている。</small>	やませ来る三沢空港視界ゼロ	
										宮崎チアキ	野田静香	持永喜夫	岡田芳春	日高道を	